

ジョーティル・リンガム：光の柱

アミ・バンサルによる解説

シヴァ神——マハーシヴァラトウリーで私たちがたたえる至高なる神——の素晴らしさを私に最も早く紹介してくれたものの一つは、「シュリー・グル・ギーター」でした。私のグル、シュリー・グルマーイ・チッドヴィラーサーナンダの教えを勉強し、また、定期的にグルデーヴ・シッダ・ピートウを訪問して育った若者として、シッダ・ヨーガの道において「シュリー・グル・ギーター」は最も神聖な教典の一つであると知っていました。シヴァ神が女神パールヴァティーに授けたこのスワーディヤーヤの教典は、シュリー・グルの本質についての素晴らしい解説で、私を常に魅了しました。その教えの中に、私はどのように私のグルを理解し、価値を認め、信奉するかの方角を見いだしました。

私が 11 歳ぐらいの時、グルデーヴ・シッダ・ピートウを訪れていたある日の午後、私は自分のスワーディヤーヤの本を手に取り、「シュリー・グル・ギーター」の詩節の意味を読んで詳しく勉強し始めました。シヴァ神がこの教典の中で伝授している 182 節のそれぞれについて学ぶには、数日かかりました。私は、すべてのサンスクリット語の言葉に集中して、その意味を理解しようしました。この勉強が終わる頃には、一つのことがとても明確になりました。それはシヴァ神の教えでした。

न गुरोरधिकं न गुरोरधिकम्।
na guror-adhikam na guror-adhikam ।

シュリー・グルより偉大なものはない。
まさに、シュリー・グルより偉大なものはない。¹

इदमेव शिवं त्विदमेव शिवम्।
idam eva shivam tv-idam eva shivam ।

グルの原理はシヴァである。
まさに、グルの原理はシヴァである。²

私は、シュリー・グルは、実際、至高なるシヴァである——シヴァ神は私のグルと違いはない——という、この明確さに気持ちがあらいだことを覚えています。その時から、私が、チャイタンニヤ・マントラ、つまりシュリー・グルから与えられ、グルのシャクティによって活性化されたマントラである、オーム・ナマー・シヴァーヤを繰り返すたびに、至高なるシヴァ神であり、私自身の内側の大きいなる自己である私のグルの存在を、私はたたえているのだと知りました。

インドの教典の伝統において、シヴァ神は、単にあまたの神々の一つではありません。彼は、マハーデーヴァ、すべての神々の中で最も偉大な神です。同時に、シヴァ神は、アーディ・グル、原初の、そして、最も重要なグルという最高の位置を占めています。彼は、至高なる意識を体現する者で、ヨーガや瞑想、音楽、ダンスを含む、あらゆる形式での神の知識を教える者です。彼は多くの神々や賢人たちのグルです。そして、何千年にもわたって大きいなる自己の実現に向かって、何千人もの探究者たちを導いた、数え切れないほど多くの教典を明らかにしてきました。

「シュリー・グル・ギーター」の中で、シヴァ神自らが、この「グル」という言葉の意味について説明しています。

गुकारस्त्वन्यकारश्च रुकारस्तेज उच्यते।
अज्ञान-ग्रासकं ब्रह्म गुरुरेव न संशयः॥

gukāras tv andhakāraś ca rukāras teja ucyate |
ajñāna-grāsakam brahma gurur eva na saṁśayaḥ ||

音節「グ」は闇を意味し、音節「ル」は光を表す。疑いなく、シュリー・グルは無知を飲み込み破壊する至高なる絶対者である。³

このように、真の「グ・ル」は、私たちを幻想の不明確さや無知の暗闇から連れ出し、知識の光と、私たち自身の大いなる自己の神聖な気づきへと至らせる存在なのです。

シヴァ神の最も崇敬される深遠な象徴の一つは、シヴァ・リングムです。シヴァ・リングムがどのように存在するようになったかの物語は、『リング・プラーナ』の中でブラフマー神が語っています。

物語は、ブラフマー神とヴィシュヌ神が天界において、どちらがより偉大であるかを議論するところから始まります。彼らが論争していると、壮大な光の柱が目の前に現れます。光は恐ろしいほどにさんざんと輝き、しかし同時に、その存在は完璧に心を落ち着かせ、静かなのです。

『リング・プラーナ』の中で、ブラフマー神はこのリングムを見た体験を語ります。

ज्वालामालासहस्राढ्यं कालानलशतोपमम्।
क्षयवृद्धिविनिर्मुक्तमादिमध्यांतवर्जितम्॥
अनौपम्यमनिर्देश्यमव्यक्तं विश्वसंभवम्।

*jvālāmālāsahasraṣṭhyam kālānalaśatopamam।
kṣayaṽṛddhivinirmuktamādimadhyāntavarjitam।।
anaupamyamanirdeśyamavyaktaṁ viśvasambhavam।*

それはすべてを焼き尽くす膨大な火に匹敵する、無限の炎の集合体だった。その光は安定し、衰えることも増すこともなかった。そのリングムは無比で傑出し、説明し難いものだった。それは宇宙の源だった。⁴

その光の息をのむほどのまばゆさに畏怖し、ブラフマー神とヴィシュヌ神は論争を止めます。双方共に、この無限の明るい柱についてもっと知りたいと切望しました。ブラフマー神はハク

チョウの姿になってその柱の始まりを見つけようと試み、ヴィシュヌ神はイノシシのアヴァターラとなってその終わりを探そうと奮闘しますが、彼らの努力は無に帰します。その光の源や末端に近づくことができなかったのです。彼らがそれを悟った時、その柱の中心から光り輝く人の姿が現れるのを目にします。それが、シヴァ神でした。

この物語の中でブラフマー神とヴィシュヌ神が見ていたのは、原初のシヴァ・リングム——スワヤンブー、すなわち自ら現れた、リングム——でした。ジョーティル・リングム、すなわち光の柱、無限の燃え盛る炎は、ただそこに在り、ただ存在し、この宇宙全体の輝く支柱だったのです。

『リング・プラーナ』の中で、ブラフマー神はさらに、最初のシヴァ・リングムの光景について、神々の集まりに説明しました。

तदा समभवत्तत्र नादो वै शब्दलक्षणः।
ओमोमिति सुरश्रेष्ठाः सुव्यक्तः प्लुतलक्षणः।

*tadā samabhavattatra nādo vai śabdalakṣaṇaḥ।
omomiti suraśreṣṭhāḥ suvyaktaḥ plutalakṣaṇaḥ।।*

おお、卓越した神々よ、すると光の柱から、とどろく原初の音オームが湧き起こった。
それは明快で確かな、綿々と続く音だった。⁵

ですからこのシヴァ・リングムは、原初の音オームの響きに他ならなかったということであり、それ故に、すべてのヴェーダとすべての知識を内包していました。『リング・プラーナ』はさらに、このリングムの光は太陽や月や火の輝きをもしのいたと言っています。プラーナはこの形のシヴァ神を描写して、シュッダ・スパティカ、すなわち属性を持たず、汚れなく、平穏で、相反性から自由な、純粋な光り輝くクリスタルであると言っています。このリングムは普遍の大いなる自己でした。それは宇宙全体を象徴するブラフマーンダ、すなわち「宇宙の卵」であり、そこからこの全宇宙が生じたのです。

シッダ・ヨーガの道では、グルマーイの教えから、そして私たち自身の体験から、この宇宙の光の柱が私たちそれぞれの存在の中にあることを学んでいます。サトルボディ(靈妙体)の視覚的な描写では、シヴァ・リンガムはしばしば、休眠状態のクンドリニー・シャクティが宿る場所であるムーラーダーラ・チャクラに座していると描かれます。このチャクラは、頭のとっぺんまでそびえている光の柱の基盤です。

探究者として、大いなる自己を知る旅は、シャクティパート・ディークシャーとしてシュリー・グルの恩恵を受け取る時に始まります。グルに示された道、グル・マールガを着実に進んで行くにつれ、私たちの内側でグルに呼び覚まされたその内なるシャクティは、サダーシヴァ、慈悲深いシヴァ神が住む場所としてインドの教典で描写されるサハスラーラ、頭頂部の千の花弁のハスまで、輝く柱を通して上昇します。ここで、マハークンドリニー・シャクティはマハーデーヴァ、偉大なるシヴァ神と一つになり、弟子は最愛のグルと、そして自分の内側にある大いなる自己と完全に一体となる体験をするのです。

シッダ・ヨーガの道で、私たちが外側で行うすべての崇拝の目的は、自らを内側の大いなる自己に導くことです。シヴァ・リンガムは、マハークンドリニー・シャクティが通った内なる光の道筋と、その神秘の道の最終地点の両方を象徴しています。シヴァ・リンガムを崇拝する時、私たちは大いなる自己の至高の光を——心の奥深くに宿る形なき形のアーディ・グルを——崇拝しているのです。

シヴァ・リンガムは、さまざまな形を取ることができます。インドのシヴァ・リンガムの多くは、自然にできたものです。それらはスワヤンブー、すなわち自ら現れたものであり、そのため、形もさま

ざまです。最もよく見られるのは、光の柱を象徴する大きな楕円形、あるいはブラフマーンダ、すなわちすべての創造の源である宇宙の卵を象徴する丸い塚の形です。

多くの寺院や家庭に設置されている人工のシヴァ・リングムは、一般的に石で作られていて、上部が丸い縦長の円柱が、土台の上に位置する台座に差し込まれています。円柱は光の柱を表しています。円柱の上部(見えている部分)は、シヴァ神を表しています。台座の中にあり、そのために見えない中部は、ヴィシュヌ神を表しています。そして円柱の底部(土台の中にあってこれも見えない)は、ブラフマー神を表しています。台座そのものは女神、至高のシャクティを表しています。

サンスクリット語のリングムという言葉の意味の一つは、「しるし」あるいは「象徴」です。シヴァ・リングムは、宇宙全体——創造、維持、破壊のエネルギー、そして最も重要な、その顕現を明らかにする力である至高なるシャクティ——を象徴しています。シヴァとシャクティは、切り離すことはできないのです。

シヴァ・リングムは、簡単なアビシェークを行うことによって最もよく崇拝されます。アビシェークの後、シヴァ・リングムに香油やビャクダンのペーストを塗り、それからシヴァ神にとって神聖な花や葉(ハスの花やビルヴァの葉など)を、リングムの上に置いてささげることもできます。その後、ランプをともし、線香をささげ、マントラ、オーム・ナマー・シヴァーヤをチャンティングしたり復唱したりするのが伝統的です。

プラーナの伝説によると、アーディ・グルであるシヴァが初めて天界でブラフマー神とヴィシュヌ神に姿を現した後、彼は信奉者を守り導くために、そのまばゆい光の柱、ジョーティル・リングムとして、時代を超えてさまざまな場所に現れました。シヴァ神が現れるたびに、彼の信奉者

たちがここに永遠にいてほしいと懇願したので、彼は人類のために物理的なリンガムの形を取ったと言われています。

インドの教典の一つである『シヴァ・マハープラーナ』は、シヴァ神の本質について次のように語っています。

लोकानामुपकारार्थं स्वलिङ्गं चाप्यकल्पयत् ।
तल्लिङ्गं पूजयित्वा तु सिद्धिं समधिगच्छति ॥

lokānāmupakārārtham svaliṅgam cāpyakalpayat /
talliṅgam pūjayitvā tu siddhim samadhigacchati //

彼、至高なるシヴァ神は、あらゆる世界の利益と向上のために
リンガムとしての形を取った。
信奉者は、その形を崇拝することにより完全となる。⁶

インドには、主なジョーティル・リンガムが 12 カ所あります。今日に至るまで、それらのジョーティル・リンガムは探究者たちによって訪問され、シヴァ神にとって最も神聖な聖地の幾つかであると考えられています。それらの周りに建てられた寺院は、精神的エネルギーの聖域です。

それらのジョーティル・リンガムの聖地はすべて、川のほとり、海の近く、湖や池など、水域の近くにあります。この地理的選択は、なぜ至高なる自己が現れるためにそれほど注目に値するのでしょうか。そこには、実用的かつ哲学的な理由があります。実用的には、水が生命の源だからであり、そこに水があれば人々は寺院のそばに定住しやすいでしょう。水は飲料や入浴に、そして食べ物を育てることに利用できます。哲学的には、水は崇拝の場所の精神的な力を保持し高めたと信じられています。

12 カ所のジョーティル・リンガムは『シヴァ・マハープラーナ』で述べられているように、現れたとされる順に番号が付けられています。それぞれが明確な重要性を持ち、シヴァ神の特定の属性を具現化しています。

シッダ・ヨーギにとって、ジョーティル・リンガムは特別な意味があります。なぜなら、バーバ・ムクターナンダとシュリー・グルマリーが、インド各地でヤートラ、つまり巡礼の一環としてそのほぼすべてを訪れ、プージャーをささげてきたからです。

ソーマナータ

最初のジョーティル・リンガムは、「月の神」を意味するソーマナータです。ソーマとは月の呼称、ナータは「神」を意味します。グジャラート州ヴェーラヴァル地区のアラビア海のほとりにあるソーマナータは、トリヴェーニ・サンガムという、ヒランヤ川、カピラ川、そして神話に出てくるサラスワティー川の合流点の近くにあると言われています。

『シヴァ・マハープラーナ』によると、月神、チャンドラデーヴァがシヴァ神にひたむきに祈ったのは、まさにここでした。物語によれば、チャンドラデーヴァが、ブラフマー神の息子であるプラジャーパティを怒らせてしまったので、プラジャーパティは、アイデンティティーとすべての輝きを失うようにチャンドラデーヴァに呪いをかけました。月神の祈りに満足し、シヴァ神はチャンドラデーヴァの前にきらめく光として現れ、満ち欠けはしても、その輝きを失わないように恩恵を与えました。さらにシヴァ神は、三日月の形のチャンドラデーヴァに、シヴァ神自身の巻き毛の中に居場所を与えるという祝福を授けました。それ以来、シヴァ神は「ソーマナータ」、月の統治者として知られています。

サンスクリット語で、ソーマという言葉は「ネクター」も意味します。「シュリー・グル・ギーター」によると、内なるグルは、チャンドラ・プラカーシャ、甘美な月光に包まれているサハスラーラの領域に宿っています。⁷

マリクアルジュナ

2番目のジョーティル・リングム、マリクアルジュナは、アーンドラ・プラデーシュ州のシュリーシャイラム地区にあり、クリシュナ川のそばの丘の上に位置しています。

「マリカ」は、女神パールヴァティーの名で、「アルジュナ」はシヴァ神を表します。伝説によると、マリクアルジュナはシヴァ神と女神パールヴァティー双方の住まいです。それはジョーティル・リングムの姿のシヴァ神の座であり、至高なる女神の座、シャクティ・ピートゥでもあります。

マリクアルジュナは、健康と繁栄を与える者で、この世の幸福を確実なものにします。『シヴァ・マハープラナ』は、マリクアルジュナの姿のシヴァ神にプージャーをささげることによって、人はすべてのみじめさから解放され、至高なる幸福に達すると述べています。「マリカ」は、シヴァ神にとってとても大切なかぐわしいジャスミンの花の一種の名前でもあります。

多くの聖人や賢人は、マリクアルジュナの姿をしたシヴァ神への敬愛を表しました。例えば、これは、インドの偉大な詩聖シュリー・アッカマハーデーヴィーが詩や歌の中で描いたシヴァ神の姿でした。彼女は、シヴァ神を「ジャスミンのように白い私の最愛の神」と呼んでいます。尊敬される賢人アーディ・シャンカラチャーラヤが、マハーデーヴァをたたえる百詩節の賛歌、「シヴァーナンダ・ラハリ」（「シヴァ神の至福の波」）を創作したのも、ここシュリーシャイラムでした。

バーバ・ムクターナンダは、幾度もマリクアルジュナを訪れ、プージャーをささげました。1973年に訪問した時、バーバはジョーティル・リングムにアビシェークを行い、自分の首に掛けていたルドラクシャのマーラーをシヴァ・リングムに掛けました。それから、彼は深い瞑想に入ったのです。その後、バーバはマーラーを取りに行きましたが、それはびくとも動こうとしませんでした。

た！ ジョーティル・リングムにくっついたも同然でした。バーバはほほ笑んで言いました。「私のマーラーが好きなようだね。彼は私のマーラーが欲しいのだ」

それからバーバはリングムに、「私のマーラーを返してもらえませんか？」と頼みました。彼がもう一度マーラーを取りに戻ると、緩んでいて簡単に外れました。バーバはマーラーを首に掛けて、寺院の僧にこう言いました。「シヴァ神は私のマーラーが欲しかったのだ。このマーラーは私のグルデーヴ、バガヴァーン・ニッティヤーナンダが私にくださったものだからね」

マハーカレーシュワラ

マッディヤ・プラデーシュ州の都市、ウッジャインにあるシプラ川の岸にマハーカレーシュワラの姿をしたシヴァ神の住まいがあります。マハー・カーラは「至高の時」を、そしてイーシュワラは「神」あるいは「統治者」を意味します。

マハーカレーシュワラとしての擬人化で、シヴァ神は、すべての時の統治者として、従って死の神ヤマとしても崇拝されています。サーダカがマハーカレーシュワラを崇拝する時、彼らは時間に束縛されない者、そして時間を超越し永遠の体験を与える者であるアーディ・グルに敬意を表しています。『シヴァ・マハープラーナ』によると、マハーカレーシュワラはまた、自然と肉体も含む、時間に束縛されたすべてのものにも祝福と保護を与えます。

オームカーレーシュワラ

4番目のジョーティル・リングムは、マッディヤ・プラデーシュ州の都市、カンドゥワの神聖なナルマダー川の岸にあるオームカーレーシュワラです。オームカーラ・イーシュワラの文字通りの意味は、「原初の音オームの神」です。

オームカーレーシュワラは、オームの本質であり、魂です。この形で、偉大なアーディ・グルは、すべての音、文字、そしてマントラの統治者として崇拝されています。彼は言葉に意味を与え

る力であるマートリカー・シャクティを統治する神です。マントラ・ジャパを実践することによって、神聖な教典を朗唱することによって、チャンティングすることによって、そしてグルの教えを勉強することによって、サーダカはすべての音と言語におけるオームカーレーシュワラの存在をさらによく理解し認識できます。

ケーダールナータ

雄大なヒマラヤの雪に覆われた山々と絵に描いたような緑の草原に囲まれた所に位置するのは、「草原の神」であるケーダールナータ、5番目のジョーティル・リングラムです。聖なるアラカナンダー川の支流であるマンダーキニー川は、ケーダールナートウの近くに源があります。

ケーダールナータの寺院は、何世紀も前に、インドの叙事詩『マハーバーラタ』に描かれた戦いの終わりに、パンダヴァたちによって建てられたと信じられています。それは、毎年何千人もの探究者たちが行うインドで最も有名な巡礼の一つに含まれています。『シヴァ・マハープラーナ』によると、ケーダールナータ神を崇拝することで、人は死と再生の循環から解放されます。

ビーマーシャンカラ

ビーマーシャンカラは、6番目のジョーティル・リングラムで、マハーラーシュトトラ州の都市、プネーの近くの、青々とした森の中にあります。それは、ビーマヴァティー川の源に位置しています。

シヴァ神は「ビーマー・シャンカラ」として知られています。というのは、神を信じるすべての高潔な人々を恐れさせた邪悪な悪魔ビーマを打ち倒したからです。ビーマは、怒り、ねたみ、そして高慢を表しています。ビーマーシャンカラという姿で、アーディ・グルは弟子の中にあるネガティブな資質を破壊します。

カシ・ヴィシュワナータ

最も聖なるガンガー川の岸に、神聖なヴァーラーナシーの都市があり、そこにはカシ・ヴィシュワナータの姿のシヴァ神である、7番目のジョーティル・リンガムの住まいがあります。これはインド全土で最も敬愛される聖地の一つです。

ヴィシュワナータやヴィシュウェシュワラは、「宇宙の神(あるいは統治者)」を意味するシヴァ神の名前です。またカシとしても一般的に知られているヴァーラーナシーは、人が住み続けている世界で最も古い都市の一つと考えられています。ジョーティル・リンガムの住まいであることに加えて、カシ・ヴィシュワナータはまた、シャクティ・ピートゥ、至高なるシャクティの座でもあります。女神パールヴァティーが、マー・アンナプールナー、全宇宙に滋養を与える至高の母、の姿でここに住んでいます。

トリヤムバケーシュワラ

8番目のジョーティル・リンガム、トリヤムバケーシュワラは、マハーラーシュトラ州の都市、ナーシクの近くのブラフマーギリ丘陵にあります。この聖域はゴダーヴァリー川の源でもあります。

「トリヤムバケーシュワラ」の意味は、「三つの目を持つ神」です。シヴァ神の第三の目は、額の真ん中にあり、内なる目を表します。それは外側の世界を認識し関わりながらも、常に内側を見ることを象徴しています。ヴィヴェーカ、識別力というこの内なる目は、サーダカを自らの無知、意識の欠如、内なる敵から守ります。

このシヴァ・リンガムが独特なのは、シヴァ神とブラフマー神とヴィシュヌ神、それぞれを象徴している三つの塚またはリンガムがあることです。

バーバ・ムクターナンダはトリヤムバケーシュワラを訪れるのが大好きでした。サーダナーをしていたある時に、この聖地の近くに居を定め、チャートウルマーシャ、精神修行に専念するモ

ンスーンの季節の4カ月の間、ここに住んだことさえありました。その後 1960 年代に、バーバは毎年、シヴァ神にプージャーをささげ、瞑想し、サツァングを持つために、信奉者のグループと共にトリヤムバケーシュワラを訪れるようになりました。

ヴァイディヤナートゥ

ヴァイディヤナートゥ、「至高なる治療者」は、9 番目のジョーティル・リンガムであり、インドのジャールカンド州、デーオーガルに位置しています。寺院は神聖なシヴァ・ガンガー池の近くにあります。

このジョーティル・リンガムは、信奉者たちのマインド、身体、心を苦しめるあらゆる病気を治して、完全にスワ・アーシュターになるように——自らの内なる大いなる自己に確立するように——導くシヴァ神の姿として崇拝されています。

ナーゲーシュワラ

グジャラート州の都市、ドゥワーラカーの近く、海のそばにあるのが、10 番目のジョーティル・リンガムであるナーゲーシュワラ、「ヘビの神」です。近辺には、ゴーピー・タラーヴやビムガジュ・タラーヴといった神聖な湖が幾つかあります。

ナーゲーシュワラ・リンガムは、明確な三つの面を持つルドラクシャの玉、トゥリ・ムキ・ルドラクシャの形をしています。クリシュナ神の故郷のドゥワーラカーに近いので、このジョーティル・リンガムはクリシュナ神によってたびたび崇拝されたと信じられています。ナーゲーシュワラ神は、嫌悪、怒り、ねたみといったあらゆる内なる毒を取り除いてくれると言われています。

ラーメーシュワラ

11 番目のジョーティル・リンガム、ラーメーシュワラ——「ラーマの神」——は、インド亜大陸の先端にあるインド半島とスリランカの間の小さな島にあります。ラーメーシュワラの寺院の敷地

内や周りにはたくさんのティルタ、聖なる水の水槽があり、寺院を訪れる信奉者は、シヴァ神のダルシャンを受け取る前にこれらのティルタで沐浴(もくよく)することが慣習となっています。

『ラーマーヤナ』によると、ラーマ神はインドの最南端にあるこの地で、ランカへ行って悪魔ラーヴァナと戦うために海を渡る前に、シヴァ神を崇拝しました。シヴァ神はラーマ神の前に現れ、勝利するよう祝福しました。そしてラーマ神は、シヴァ神にこの地に永遠に住み、人類を祝福し続けるように慎ましく懇願しました。

ラーメーシュワラ・マハーデーヴァの姿のアーディ・グルは、私たちに勇気、強さ、そして良い行いをし、ダルマを擁護する私たちの試みに勝利するよう祝福を授けます。

グリシュネーシュワラ

12 番目で最後のジョーティル・リングムは、グリシュネーシュワラ・マハーデーヴァで、マハーラーシュトラ州の都市、アウランガーバードの近くにあります。グリシュネーシュワラの姿をしたシヴァ神は、信奉者たちに許し、幸せ、そして救済を与える慈悲の神です。この姿のアーディ・グルは、他の追随を許さない恩恵と祝福を授けます。

バーバもグルマーイもグリシュネーシュワラの寺院を訪れています。グルマーイは、1980 年代の後半にインド中を巡礼する旅、ヤートラの始めにグリシュネーシュワラを訪れました。グルマーイと一緒に旅をしたシッダ・ヨーギたちは、この寺院で「シュリー・グル・ギーター」を朗唱し、ジョーティル・リングムにアビシェークを行い、そしてシッダ・ヨーガの系譜のマントラ、オーム・ナマー・シヴァーヤをチャンティングしました。

私はシヴァ・リンガムの本質と力について熟考するのが大好きです。それは、内側の神聖な光を、私がグルマリーの存在とダルシャンに関連付けるグルマリーが私の中に目覚めさせた光を、呼び起こすからです。シヴァ・リンガムについて考えること、シヴァ・リンガムを崇拝することによって、私はいつも私のグルへの深い感謝に触れます。

20 年ほど前、私はガネーシュプリー村のバガヴァーン・ニッティヤーナンダのサマーディー・シュラインの隣にあるビメーシュワラ・マハーデーヴァというシヴァ神の寺院に、グルマリーと一緒にいったシッダ・ヨーギのグループの一員でした。グルマリーがシヴァ・リンガムにプージャーをささげた後、私たちは瞑想するために、最も神聖な聖域に座りました。私はそこに軽く目を開けて座り、シュリー・グルマリーとシヴァ・リンガムに目を向けていたことを覚えています。その瞬間、私は両者が一体であるという比類ない感覚を体験しました。シヴァ・リンガムと私のグル、双方から発する神聖な光輝くシャクティは同じであるという体験です。私は双方に——アーディー・グルの姿と私のサッドゥグルに——内側で敬意をささげました。神が神を崇拝しているのを、大いなる自己が大いなる自己について瞑想しているのを、私は見ているのだと感じました。そして、グルから内なる目覚めを受け取った私も、この神聖なエネルギーにつながることで——グル・マントラを繰り返すことを通して、グル・セーヴァーをささげることを通して、グルマリーの教えを勉強し、実践することを通して、そして最愛のシュリー・グルに献身することを通してつながることにより——そこに、その場所のどこかにいたのです。



© 2022 SYDA Foundation®. 著作権所有。

¹ *Shri Guru Gita*, v. 96.

² *Shri Guru Gita*, v. 97.

³ *Shri Guru Gita*, v. 23.

⁴ *Linga Purana*, 17.34–35.

⁵ *Linga Purana*, 17.49.

⁶ *Shiva Mahapurana*, 8.1.17.

⁷ *Shri Guru Gita*, v. 91.